



TITLE:

ロシア経済思想史の研究 - プレハーノフとロシア資本主義論史(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

田中, 真晴

CITATION:

田中, 真晴. ロシア経済思想史の研究 - プレハーノフとロシア資本主義論史. 京都大学, 1968, 経済学博士

ISSUE DATE:

1968-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212805>

RIGHT:

【 17 】

氏 名	田 中 真 晴 た なか まさ はる
学 位 の 種 類	経 済 学 博 士
学 位 記 番 号	論 経 博 第 19 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 43 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	ロ シ ア 経 済 思 想 史 の 研 究 — プレハーノフとロシア資本主義論史 —

論文調査委員 (主 査) 教 授 出 口 勇 蔵 教 授 大 野 英 二 教 授 菱 山 泉

論 文 内 容 の 要 旨

この論文は本論と補論とから構成されている。

本論は3篇にわかたれ、その前篇において、19世紀末における先駆的なロシア資本主義論の紹介とプレハーノフによる、ロシア資本主義のマルクス主義的分析が明らかにされ、中篇において、1880年代から90年代にいたるロシアの経済思想の動向が語られ、後篇において、90年代のロシア資本主義論の諸類型との関連において、プレハーノフの経済思想が論じられている。そして中篇のはじめには、プレハーノフの著作で刊行されているものとかれに関する従来の研究、および、1880年から90年にいたるロシアの経済思想の大意が紹介されている。

ロシアの資本主義論として逸することのできないのは、レーニンのそれである。だからレーニンの理論とプレハーノフの理論の比較は、重要な研究課題である。この課題にこたえて著者がおこなった研究が、補論に収められた2つの補論である。

以上のほか、プレハーノフを中心において編まれたロシア資本主義論史の詳しい年表と内外の関係文献が付録としてつけられている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

ゲオルギー・ヴァレンチノヴィッチ・プレハーノフ(1856—1918)の思想がわが国にはじめて紹介されたのは大正10年(1921)であり、その後もこの思想家の論著の翻訳・紹介は、大太平洋戦争による中断は別として、たえまなく行なわれてきたけれども、プレハーノフ研究というべきものはまだ現われていない。

この論文は、対象を経済思想に限定しているとはいえ、プレハーノフに関する、本格的な研究として、わが国では最初の、しかも高い研究水準をしめしたものであって、経済思想史上の業績として内外に誇るに足りる。

そもそも、経済思想史の内容は一定していない。むしろ論者の立場に応じてまちまちである。この論文

における経済思想史とは「経済理論と歴史理論とを契機としてうちに含み、かつ実在への視線をもつような」それであって、普通の経済学史や経済学説史とはことなる。そしてこのちがいが、本論文の狙いが説明される。

（第1）プレハーノフが主として関心をむけたのは資本主義への道をたどるロシアの社会であった。だからこの論文では普通の経済学史よりも視野が拡げられており、この面からいうなら、本論文は「プレハーノフとロシア資本主義論史」である。（第2）プレハーノフはロシアにおける最初のマルクス主義者である。だからこの面からいえば、本論文は「プレハーノフとロシア・マルクス主義理論の形成」を研究目標とするものである。

著者はプレハーノフを「原理論者」としてとらえるが、それは「状況に対する非妥協性」と「歴史的変化に対する感覚喪失」との二重の意味で、マルクス主義の原理を堅持しようとした思想家だったという意味である。かれにおいてはじめて、ロシア社会がアジア的な共同体の構造をつよくもった社会であるとともに——ツァーリズムの支配はこの上に築かれた——、また資本主義化への道を歩んでいるものとして、とらえられた。このことは著者がプレハーノフの思想の生長をあとづけながら説いているのであって、その後、ナロードニキや合法マルクス主義の思想と比較しながら、この思想の固成の経過が詳細に論じられる。そして実践論的には、ロシアにおける非連続的二段階革命論の主張がおこなわれたことが、あとづけられるのである。

著者はさらに経済思想についてくわしく分析をおこなう。1880年以後のロシアの各層の経済思想の全貌はわが国ではじめて行なわれた研究であって、ツァーリズム体制の側、ロシアの大学での、および在野の諸方面の経済思想の諸潮流が、ロシアの経済・社会問題との関連で紹介せられ、哲学界と経済学界との交流のあとや『資本論』の受容の諸相が論及され、1890年代のロシア資本主義論の代表として、ダニエリソン、ストルーヴェ、およびトウガン・バラノフスキーの経済思想が語られたのちに、プレハーノフの経済思想について再び克明な解明がおこなわれる。この部分は本論文の圧巻というべく、史的唯物論の客観主義的把握のもとで展開される、ロシアの経済生活と資本主義の法則が、説き明かされるのである。そしてプレハーノフの経済思想の達成と思想的生命の敗北とかれののこした遺産とが明らかにされる。そして最後に、かれの遺産がレーニンによって継承・批判・発展されてゆくのが概観されているのである。

著者は文献蒐集のために異常な努力をかさね、集められたテキストを刻明に読みこなし、参考文献をあまねく渉獵して、長年にわたってこの研究にしたがい、ついにこの大論文を完成したのである。

著述として公刊された本論文は、わが学界に大きな反響をよび、ロシア思想史研究上の偉業と名づけられ、社会科学上の名著として賞讃せられ、すでにわが学界に不動の声価をかちえている。プレハーノフ研究にたいして大きな里程表を建てたとも、経済思想史上の記念すべき業績をあげたとも、いうことができる。

本論文は経済学博士の学位論文として価値あるものと認められる。